

月裏念写の
月裏衛星写真との一致について

(財) 福来心理学研究所

月の裏側の念写は、三田光一氏が福来博士の提案を受けて、三田・福来の共同実験で1931年に念写したものである。このとき2枚出現している。図像の同様のものが1933年に三田が岐阜公会堂で行った念写の公開実験でも出現している。

この念写像が、地球上からは絶対に見えない実際の月の裏側であるのかどうか、当時検証手段が全くなかったわけであるが、月ロケットによる月裏の撮影が可能になってから、研究が可能になった。

1969年から2001年にわたって、故東京大学名誉教授後藤以紀工学博士や福来心理学研究所の佐佐木康二研究部長(現所長)により、数学的方法での比較研究が行われ、米国航空宇宙局(NASA)の月面写真と念写像はほぼ一致が認められたとされた。

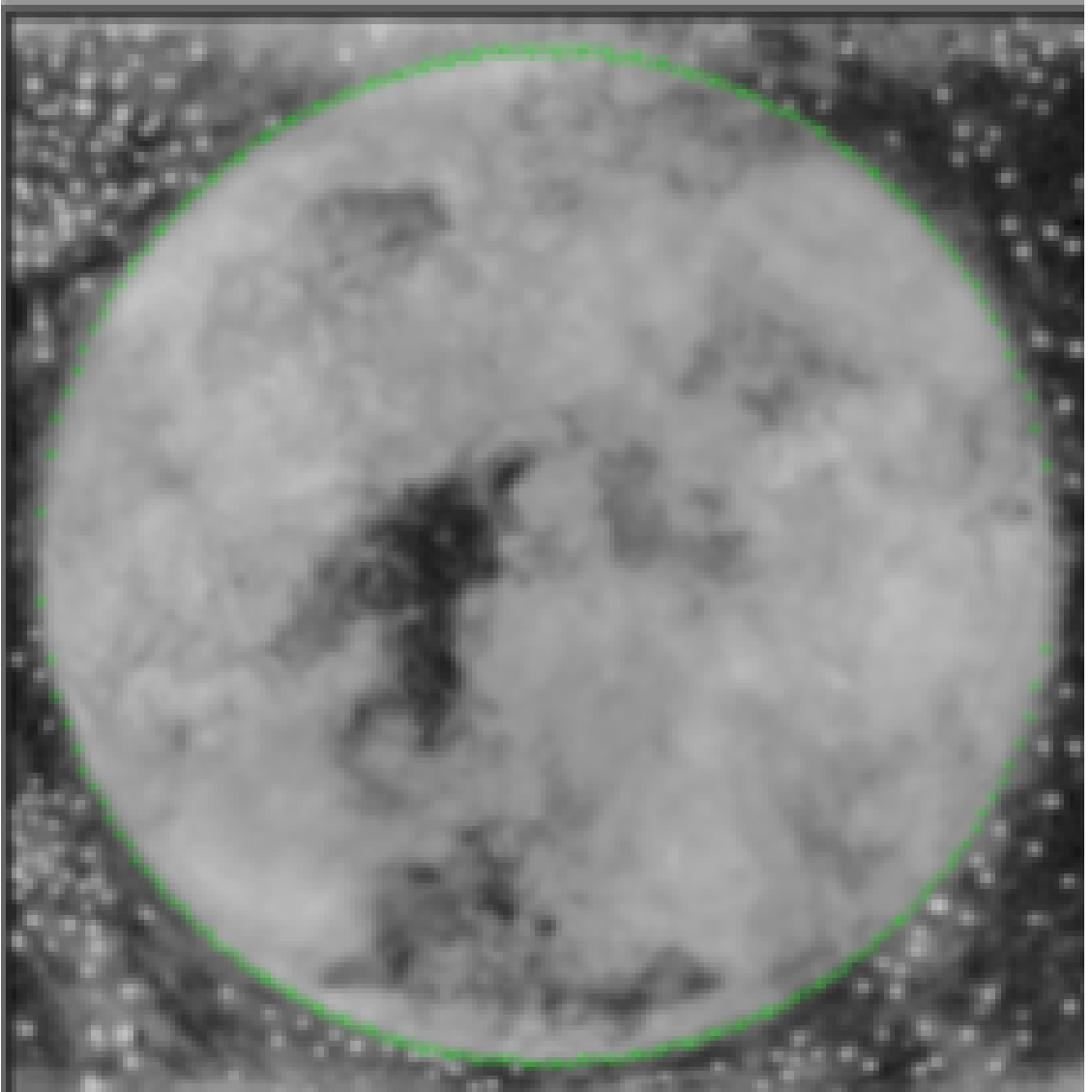
まず、後藤博士は1969年から1972年まで、アポロ宇宙船が捉えた月裏写真や当時の月球儀とのクレーター位置の数学的比較により、6, 7割は一致すると見られる月裏念写の視点を特定した。その研究報告は1985年、86年に(財)日本心霊科学協会から出版されている。この成果は1995年リーダーズ・ダイジェスト社の不思議史事典に1頁半にわたり紹介された。しかし、ほとんど似ていないとの批判的反応もあった。

佐佐木康二氏は、クレーター位置のみの比較でなく白黒濃淡で比較すべきではないかとの考え方から、1995年ころからコンピューターによる比較研究を始め、コンピューター画像の画素についての相関係数を出すという方法で比較し、後藤博士が指摘した位置とは別の位置であったが、月裏念写と月裏写真は面積比で8割一致することを確認した。この研究報告は福来博士没後50周年を記念して2001年に出版された(財)福来心理学研究所研究報告第5巻に掲載されている。

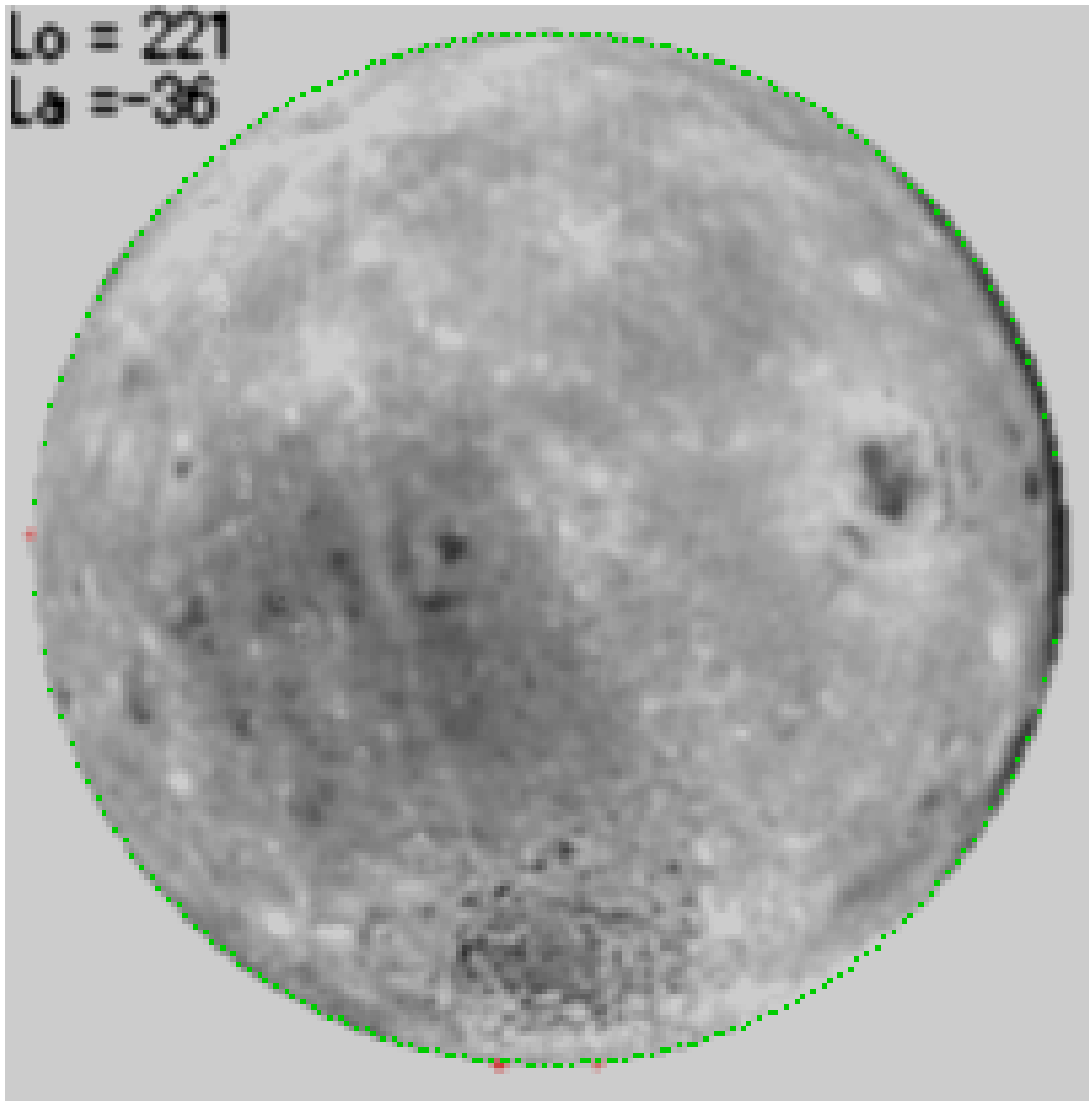
このことは三田氏の月裏透視は正確であることを示しており、従来科学の範疇では説明不能であることから、科学の進歩、人類の視野のさらなる拡大が示唆される。また、こうしたことは三田氏のみのもことかもしれないが、人間にはすばらしい能力とりわけ透視力が少なくとも潜在的には備わっている可能性があることを示唆しているとは云えるだろう。

以下に佐佐木氏の研究で一致が明らかとなった月裏念写(1933年)とクレメンタイン衛星による月裏写真(1994年)との比較を掲げる。後藤博士の比較で用いられた一般に発表されている念写像ではなく、それを裏返しにし時計回りに90度回転した像に対して、月の裏側の中心から南西の地点(緯度-36度、経度221度およびその周辺)に視点を置いたときのみ相関係数0.62程度(画像上月の部分の均等な10424点での比較)を得た(当時の念写像では文字が裏返しに写ったり90度回転することはよくある)。なお、後藤博士が用いた像ではどの視点でも統計的に「ほとんど相関がない」を意味する0.20以下であった。

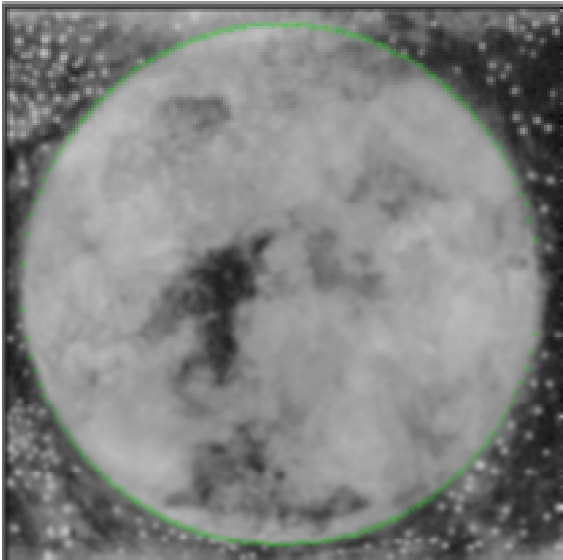
詳細は(財)福来心理学研究所研究報告第5巻(2001)をご覧ください。



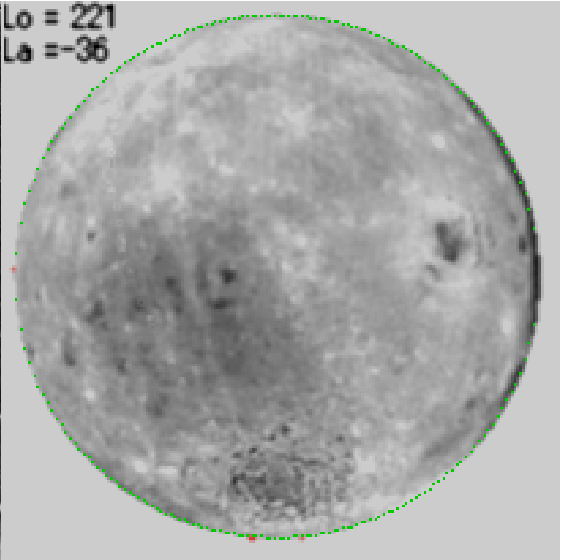
1933年の月裏念写



1994年クレメンタイン画像による

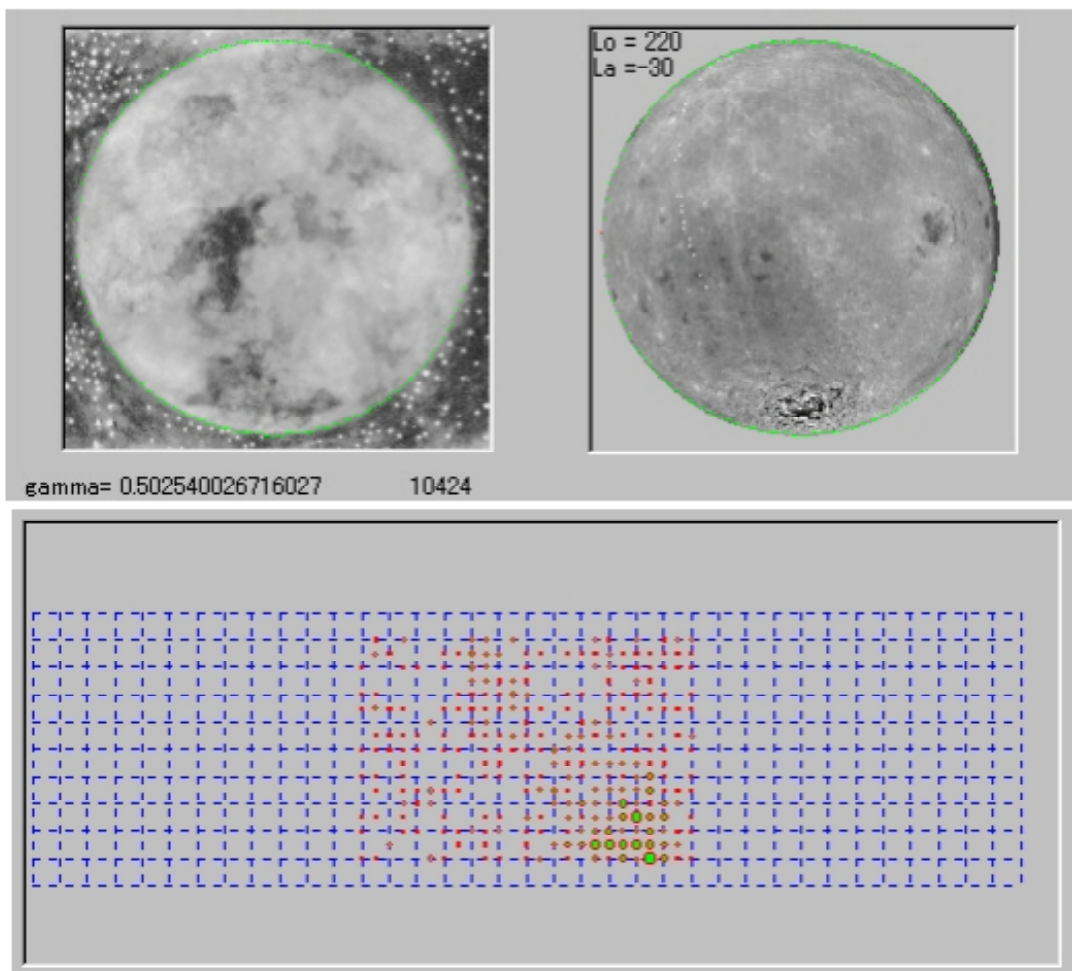


Lo = 221
La = -36



1933年の月裏念写

1994年クレメンタイン画像による



相関係数の分布図

(丸の半径が相関係数の大きさを示す)

(格子は図10の月面地図の緯度経度を10度刻みで示したもの。中央が緯度0度、経度180度)

出典：佐佐木康二『「月裏念写」の新しい数理解析(Ⅰ)』(財)福来心理学研究所研究報告第5巻(2001)